

# まつりを 見に行く

その5



## 越前市深草

# たけふ・みたままつり

きょうは特別な日。地元の人たちが守り育ててきたまつりが始まる。お雛子、みこし、厳かな儀式。そしていっとき、人ではないものと交信する。きょうは特別な日。そこに住む人たちの「特別」を探しに、旅に出た。

墓地の通路にはびっしりとロウソクが並び、墓から墓へ、赤い衣の住職がわりふわりと移動する。今夜はこの世とあの世が混じり合う。

### まつりの準備



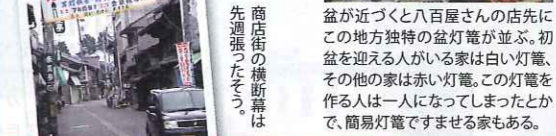
まつりを9日後に控えた日曜日の朝、金剛院の境内で、「瀧い・たけふ・大すき会」の面々によるお焚き上げ場の回廊づくりが始まった。杭を地面に打ち込み、横を乗せて固定する。横にはロウソクを立てる釘が植えてある。きっちりと測ってやる人、アバウトな人、性格が出ますね。



境内や寺の周辺に幟を立てる人も。



午後までかかって回廊が完成した。右回りに三回回ってお焚き上げ場に到着する。「右廻三匝(うようさんそう)」という敬意を表す礼法に従っているようだ。



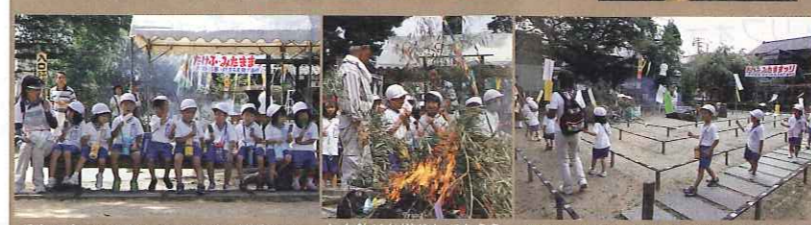
盆が近づくと八百屋さんの店先にこの地方独特の盆灯籠が並び、初盆を迎える人がいる家は白い灯籠、その他の家は赤い灯籠。この灯籠を作る人は一人になってしまったとかで、簡易灯籠ですませる家もある。

### 【まつりメモ】

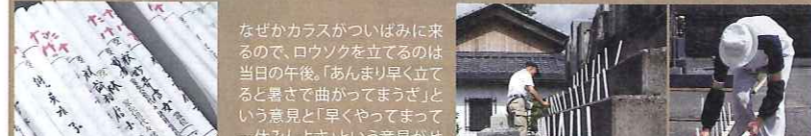
越前市深草にある金剛院にて、新暦の盆である7月15日に行われる。近隣の人たちが、盆の間仏壇に供えた盆灯籠や供物、七夕飾りを持参し、お焚き上げ場で燃やす。また、戒名や家名の書かれたロウソクが寺のあちこちに立てられ、午後7時の点灯から燃え尽きるまでの2時間程、幻想的な風景を見せる。



寺の方も準備万端。住職頭助大明さんの書く独特の文字による看板があちこちに出現していた。



それからアイスももらいました。抹茶と小豆。園児の希望は小豆に集中。七夕飾りを燃やしてもらおう。竹が爆ぜたのでみんなビツクリ。朝10時、近所の武生西幼稚園の子どもたちが、七夕飾りのお焚き上げにやってきました。先生と一緒に回廊を回って、



なぜかカラスがついばみに来るので、ロウソクを立てるのは当日の午後。「あんまり早く立てると曇らせて曲がっちゃうぞ」という意見と「早くやってまっぴら休ませよ」という意見がせめぎあった結果、午後2時から3時という一番ハードな時間に作業が行われるコトに...



猫の手も借りたいとオンちゃんたちが言うので、旅人もロウソク立て作業を手伝いました。

夕暮れ迫る頃、集まった人たちの手で一斉にロウソクの火が灯された。すぐに回廊を人が巡り始める。手に手に盆灯籠や精霊短冊を持ち、読経の響く中をゆっくと廻る人たちの顔が、次第に灯りの色に染まっていく。みるみるうちに闇が濃くなり満月が光り出す。さあ、冥界への帰りの道が開く時間だ。(瀬川あづさ)

広い墓地一面にロウソクの灯が揺れている。境内から読経が遠く聞こえてくる。あちらは人でいっぱいなのに、こちらには誰もいないのか...と思ったら、その墓石の前に二人、少し離れた墓の前にも一家族。あ、遠くの方にもなあんただ、たくさんいるのじゃないか。みんな無言で手を合わせている。今夜は、あの世とこの世の境目が曖昧になっているような気がしてならない。おや、その小柄なおばあさんはさっきからいつたつて...  
越前市の金剛院で「みたままつり」が開かれるようになって17年目。新しいまつりだけれど、そのきっかけは昔からの風習にある。旧武生の市街地では、盆に色鮮やかな灯籠を飾り、盆の終わりに川へ流していた。ところが下流の地域から「川が汚れる」と苦情が出るようになり、その替わりに...と始まった「盆灯籠お焚き上げ」の行事なのだ。  
金剛院は曹洞宗のお寺だが、まつりは宗派も檀家も関係なし。寺のある深草二丁目の住人を中心とした「瀧い・たけふ・大すき会」が取り仕切る。まつりが近づく、男たちは日曜日に集まり、幟を立てたり、お焚き上げ用の回廊を作ったりする。女性陣はロウソクの準備。申込書に従って戒名や家名を書いた紙をロウソクに巻く。「まつり以外に寺子屋の会とかいろいろやってるから、何かって言うと寺に集まって飲むよ。金剛院サロントって呼んでるんよ」と会の事務局長佐々木さん。お寺って元々そういうものですよ。ね。  
まつりの日には、お焚き上げの回廊、境内、墓地と、寺のあらゆる場所にロウソクが立てられる。約6000本というが、当日受け付けるロウソクも多いので、正確な数はわからない。この数え切れないロウソク灯が、あの世とこの世を結んでくれる。

## 深草ってこんなところ

深草地区は、一丁目に龍泉寺、二丁目に金剛院と二つの大きな寺があり、寺を囲むように町がある。古くからの町なので道が狭い。江戸時代以前の北陸道は金剛院の前を通っていたというが、この道もとにかく狭い。今も、車じゃなくて歩行者サイズの町だ。

現在金剛院がある場所には、戦国時代、青木紀伊守の城があった。古い墓地の周辺が盛り上がっているのは、城の土塁の跡だという。墓地には青木家の墓もある。

江戸時代になり、本多富正が府中の領主になると、富正は青木氏ゆかりの寺を城跡に移した。これが今の金剛院となる。ちなみに本多家の墓は龍泉寺にあるので、歴史ロマン的にも興味深い地区なのだ。



金剛院の東側の道。江戸時代以前の北陸道だった。手前で直角に曲がり、この先でもまた曲がる。



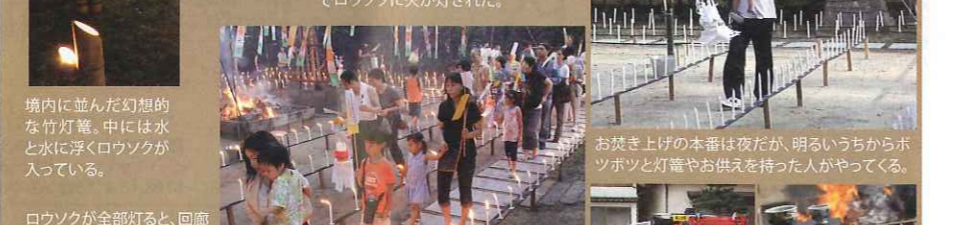
金剛院の古い方の墓地。盛り上がっているのは城の土塁の跡。江戸時代の年号が刻まれた墓石がたくさんあり、城主だった青木紀伊守の墓もある。



町内にある枚井手(ひらいで)神社。延喜式にもある神社で、陶土(焼き物の土)の神様が祀られているという。



深草には番所があり、天保の飢饉の時には、備蓄米を求めてやってきた人々がここで足止めされ大勢亡くなったという。死者は金剛院などに埋葬され地蔵が祀られた。今は深草郵便局の横に地蔵堂がある。



祈り。

さあ、準備OK!

ロケット花火で遊ぶ親子...ではなくカラス除け。

午後7時の点灯式を前に、境内のにぎわいもピーク。

家の七夕飾りを持った親子がやってきました。

来賓の挨拶に続いて、子どもたちの手でロウソクに火が灯された。

二時間近くの間、交替で絶え間なく読経を続けた坊主チーム。

境内に並んだ幻想的な竹灯籠。中には水と水に浮くロウソクが入っている。

お焚き上げの本番は夜だが、明るいうちからボツボツと灯籠やお供えを持った人がやってくる。

消防団も待機中。実はこのあと、あわや生垣に火が...という場面があり大活躍。

ロウソクが全部灯ると、回廊にいた人たちが流れるように歩き始めた。

働いた男の背中。お参りの人から灯籠などを受け取り火にくる係を担当。暑い中、彼は一日中火の横で頑張った。

溶けた紙が紙との間に溜まって灯が消えないようメンテナンスをして歩くスタッフ。

みるみる空は暗くなり、お焚き上げの炎が明るくなる。

寺の裏側にある墓地も別世界のようになっていた。

蕎麦や団子の夜店も出る。